

近世尾張のやきもの 資料紹介2

— 豊楽焼（初代利慶） 不二香合 —

● 武部真木

近世尾張藩のやきものとの関係は、古くからの窯業地を含むこともあり他地域にみられない特異なものがある。藩制下の産業への強い関与はもとより、特に茶陶への関心が高い藩主は直接御庭窯を経営した。ここでは江戸時代後期に藩の御用をつとめた豊楽焼の資料として、製作年代の推定できる初代利慶の作品について紹介する。

1. 豊楽焼

豊楽焼（とよろくやき・ほうらくやき）は江戸時代後期に始まった名古屋のやきものである。初代（加藤）利慶より「御焼物師」として尾張藩の御用をつとめ*、八代（大喜）豊助が没する大正14年（1925）のまでのおよそ130年の間に前津にあった大池の傍で様々な茶の湯の道具が造られた。

その製品は、軟陶質の^{らくやき}楽焼、雲華焼に始まり、南蛮写、素焼きした器表に絵具で絵付した「御所風」製品、四代豊助が創案し人気を博した「木具写」（焼成後に表面に漆を塗り漆器のように仕上げたもの）など多様であり、常滑・瀬戸の陶工との繋がり、塗師、蒔絵師、画家、文人、茶人など京都の焼物に学ぶ機会を得た交流関係が浮かび上がる。多くの需要がありながらも名古屋では茶陶の焼物師が極端に少なく、そうした背景も「豊楽焼」の多彩なありようを特色づけていると考えられている**。

2. 初代利慶 不二香合

資料は、富士山を象った陶器香合である***。

* 「青楽名刺」の刻書「寛政六寅八月十九日 奉上御神前御焼物師加藤利慶」（『一楽會誌二』大正12年の尾張古陶器陳列会の出品目録）

** 野場喜子 1996「豊楽焼をめぐる人々」『名古屋博物館研究紀要20』

*** 箱書（蓋表）「文久元年 香爐入 常山」

身部分の底型は7.0cm、身と円錐形の蓋部分を併せた全体の器高は4.4cmあり、身の外面底部に刻書をもつ。

蓋の富士山頂付近は淡く白い雪に覆われている。雪の範囲にはわずかに白濁した透明釉が掛かり、素地が見える。山頂火口と谷筋の凹みにはややかすれた薄い鉄釉がつたい、その下の山裾にかけては鮮やかな緑釉が身の側面までつづく。蓋および身の、端部も含めた内面には黄緑色を帯びた透明釉が薄くかかり、それぞれ3つの小さな目跡が残る。内側にみえる精緻な成形技術は、外観の穏やかな印象とは異なる。身の外面底部は平滑であり、わずかに白濁した釉に黄色味がかかった水玉模様が透けてみえる。

底面の刻書は、先端が鋭く細い工具で焼成前に刻まれており、筆致は比較的滑らかである。胎土の緻密さが想像される。

「七十八翁 利慶
贈 帶 宝 老」

初代利慶（1708～96）の78歳、天明5年（1785）の作品であることを示している。

帯のような長いものを節目の歳に贈り、無病息災や長命を祈る習いがあり、そのような意が込められたものであろうか。

利慶の作品として知られている茶器は、それほど多くはない。菊花文香炉（「利慶」印、漆塗沈金「吉政」銘）、灰器（「利慶」印）、手付菓子器（「利慶」印）、蓋茶碗 十客（「利慶」「不

二亭」印) など多様なものがある。このほかに、江戸の尾張藩上屋敷遺跡の発掘調査において「利慶」印のある陶器花生が見つかった。

さて、利慶が居所とした前津小林村^{カクレサト}の隠郷付近は文人や茶人が好んで邸宅を構えた場所であった。また、利慶がかたわらに窯を築き、豊楽焼後代も同じく周辺で製作した「大池」は、寛文年間頃に貯水池として掘削され大正まで存在した*。江戸時代中期以降には、その池畔

* 現在の中警察署の付近にあたり、署の北側の大池公園に名称が残る。

引用・参考文献

- 新宿区市谷本村町遺跡調査団 1995『市谷本村町遺跡―(仮称)警視庁単身待機宿舍服遠寮建設に伴う緊急発掘調査報告書―』
 小野佐和子 1987「城下町名古屋の行楽地と農村」農村計画学会誌 6-1 農村計画学会
 名古屋市博物館 1995「名古屋のやきもの 豊楽焼」企画展図録
 野場喜子 1996「豊楽焼をめぐる人々」『名古屋市博物館研究紀要 20』
 名古屋市博物館 2006「富士見の里 昔の前津―江戸から昭和―」展示図録
 神崎かず子 2018「第二節 一 名古屋市内諸窯」『愛知県史 別編 文化財 5 工芸』愛知県

は南側に広がる富士見原とともに名古屋城下近郊の行楽地の一つとして賑わう場所となり、安政七年(1860)には桜が植えられたという。

土を出てつちに一期を過ごされて
 土に帰のあら嬉身哉

(名古屋市瑞穂区 盛屋寺の墓に残る 利慶辞世の和歌)

本稿執筆に際し、資料実見についてのご配慮とご教授等をいただきました小澤一弘氏・故 江崎 武氏にはここに御礼申し上げます。

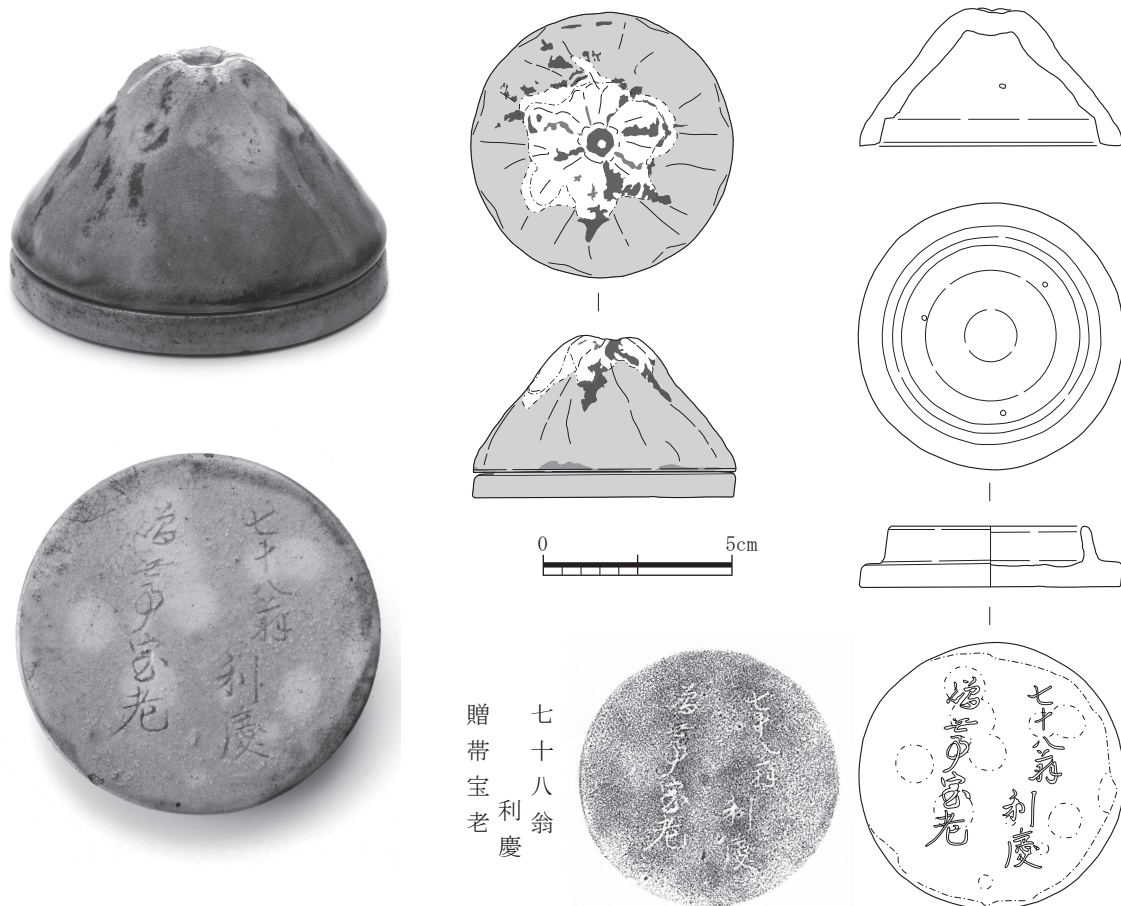


図 豊楽焼 富士香合 (実測図縮尺 1/2)